



【オーケストラ配置図】

2/8 第1035回定期演奏会

※楽器の配置は一例です。
当日のステージで確認
してください。

ヤングシート

Young Seat

2/8 2026
(日)

会場 東京芸術劇場コンサートホール

第1035回定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.1035 C Series

指揮 / ベン・グラスバーグ

ピアノ / アンナ・ヴィニツカヤ

メラニー・ボニス：
クレオパトラの夢 op.180 [日本初演]
(約9分)

ラヴェル：
左手のためのピアノ協奏曲 ニ長調
(約19分)

バルトーク：
管弦楽のための協奏曲 Sz.116
(約37分)

東京都交響楽団

**ホールでの
過ごし方**

- ◎携帯電話など音や光を発するモノは電源を切りましょう。
- ◎演奏中は静かに聴きましょう！周りの人も演奏を楽しんでいます。
- ◎公演中の録音・録画、写真撮影は禁止です。終演後のカーテンコール時のみ写真の撮影が可能です。



指揮

ベン・グラスバーグ Ben GLASSBERG, Conductor

Profile

ルーアン・ノルマンディ・オペラ (フランス) 音楽監督。これまでにウィーン・フォルクスオーパー音楽監督、リヨン国立管弦楽団准客演指揮者などを歴任。
イギリス出身。23歳で第55回ブザンソン指揮者コンクールにて優勝し世界中の注目を集めた。ヴェルディ『リゴレット』、モーツァルト『皇帝ティートの慈悲』などのオペラや、グラン・カナリア・フィルハーモニー管弦楽団、スウェーデン放送交響楽団などを指揮している。都響とは2023年3月に初共演、今回が2度目の登壇となる。



ピアノ

アンナ・ヴィニツカヤ Anna VINNITSKAYA, Piano

2007年、エリザベート王妃国際音楽コンクール優勝。これまでに、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団などと、指揮者ではゲルギエフ、フェドセーフ、インバル、デュトワらと共演。2019年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期公演にも登場している。
2009年よりハンブルク音楽演劇大学教授。これまでに9枚のCDをリリース、ECHO Klassik賞を2度受賞している。都響とは2016年9月に初共演、今回が4度目の共演となる。

管弦楽 東京都交響楽団 Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

東京オリンピックの記念文化事業として、東京都が1965年に設立し、2025年に創立60周年を迎えた。都響(ときょう)という愛称で親しまれている。東京文化会館(上野)を本拠地として、オーケストラの演奏会を開催する他、交響組曲『ドラゴンクエスト』(全シリーズ)などゲーム音楽の演奏、教育活動や福祉施設での出張演奏など多彩な活動を展開している。



©Rikimaru Hotta



都響ヤングシートは、企業や団体からご支援をいただき、休日昼間の都響主催公演を中心に青少年と保護者をご招待し、オーケストラコンサートをお楽しみいただいています。ご支援企業については月刊都響をご覧ください。

Program Notes プログラムノート

今日のコンサートでは、イギリス生まれの指揮者ベン・グラスバークさんが、3年ぶりに都響を指揮します。プログラムは、フランスの女性作曲家ボニスの美しい曲からスタート。つづいてピアニストのヴィニツカヤさんが「左手だけ」で弾くラヴェルの協奏曲を披露し、最後はバルトークのカラフルなオーケストラ曲でしめくります。

メラニー・ボニス： クレオパトラの夢 op.180

メラニー・ボニス（1858～1937）はフランス生まれの女性作曲家です。彼女が活動した19世紀から20世紀初めは、まだ女性がプロの作曲家としてなかなか認めてもらえない時代でした。しかしボニスは、「女に作曲はできない」という世間の偏見に負けることなく、楽譜に「メル・ボニス」という男性ともとれる名前を記して、情熱的に作品を発表し続けました。

《クレオパトラの夢》は、エジプトの伝説的な女王を題材にした作品です。日本では初めて演奏されます。もともとはピアノのために書かれましたが、後にボニス自身の手によって、色彩豊かなオーケストラ曲へと生まれ変わりました。ハープの透き通るような音色や、クラリネットやイングリッシュホルンが奏でる優しいメロディー、弦楽器の流れるような響きが魅力的に登場します。ゆるゆると変化するリズムは、まるで砂漠で見る夢の中をさまよっているかのようです。長い間歴史に埋もれていた、ボニスの美しくミステリアスな音色を楽しんでください。



Mélanie Bonis



『クレオパトラ』(フェリックス・ジーム作)

ラヴェル： 左手のためのピアノ協奏曲 二長調

モーリス・ラヴェル（1875～1937）は、ボニスと同じ時代を生きたフランスの作曲家です（同じ年に亡くなっています）。1930年に完成した《左手のためのピアノ協奏曲》は、少し特別な理由から生まれました。第一次世界大戦で右手を失ったピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタインから「左手だけで演奏できる曲」を作ってほしいと頼まれたのです。ラヴェルは、この難しいリクエストにひるまず、「挑戦すること」そのものを音楽にしようと思いました。そして、左手だけで演奏しているとは思



Maurice Ravel

えないほど、豊かな響きをもつ協奏曲に仕上げたのです。

曲は3つの部分（遅く→速く→また遅く）が切れ目なく続く構成です。最初は暗闇で何かが動き出すかのように、深みのある低音から始まります。やがてピアノが登場すると、じわじわと音楽の厚みや広がりが増していきます。速い部分では、行進曲のように力強く突き進み、やがて再び最初のゆったりとした音楽が舞い戻りますが、オーケストラが一段とカラフルに鳴り響きます。広い音域を行き来するピアノ独奏がたっぴりと続き、最後は行進曲のリズムが一瞬現れて華やかに終わります。

バルトーク： 管弦楽のための協奏曲

作曲者のベラ・バルトーク（1881～1945）はハンガリーを代表する作曲家ですが、生涯の終わりの頃には、戦争を逃れてハンガリーからアメリカへ渡りました。しかしアメリカでは貧しさと重い病気（白血病）に苦しみ、「もう二度と作曲できない」と絶望していました。友人たちはバルトークに元気を取り戻してもらうため、作曲の仕事を依頼すると、彼は奇跡的に回復。死の淵にいらながらも、わずか8週間という猛スピードでこの傑作を書き上げました。まさに「命の力」が詰まった作品です。

ふつう「協奏曲」といえば主役となる独奏楽器とオーケストラのための作品ですが、この曲は「オーケストラ全員がそれぞれ主役」として扱われているため、このタイトルがつかしました。どの楽器も見せ場たっぷりです。

曲は5つの楽章で成り立っています。**第1楽章「序奏」**は静けさから始まり、徐々にエネルギーをためていきます。最後は金管楽器が力強く奏でるフレーズで終わります。**第2楽章「対の遊び」**は、さまざまな管楽器が「2人1組」になって次々と登場する楽しい楽章。小太鼓のリズムも印象的です。中間部は金管楽器による讚美歌のような音楽が聞こえます。**第3楽章「悲歌」**は「夜の音楽」と呼ばれ、少し不気味でミステリアスな楽章です。**第4楽章「中断された間奏曲」**には突然ふざけたような行進曲が出てきたり、ケタケタと笑うような音型が鳴り響き、音楽の流れを邪魔します。**第5楽章「終曲」**は生きる喜びを爆発させるような、超高速のフィナーレとなります。

文/飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）



Bartók Béla

東京都交響楽団YouTubeチャンネルでは、オーケストラで使われる楽器の紹介等をしています。番外編として、都響のリハーサル室と道具のご紹介もしています。舞台上上がる演奏者を支える舞台スタッフの仕事にもご注目ください！

